

平成 27 年度奨励研究(共同研究) 事業報告(概要版)

フットパスの可能性に関する研究 ―今金町を中心に―

I 研究の経緯と背景

札幌市からは約 180 キロ、函館市からは約 120 キロの渡島半島の北部に位置する今金町は、南はユーラップ山系を挟んで八雲町、北は狩場山系を介して島牧村、東は低い山地を経て長万部町、西はせたな町に接している。基幹産業は農業で、後志利別川による肥沃な土壌と、周囲を山地に囲まれた内陸性気候を活かし、男爵いもや米、大豆、軟白長ネギや大根など、関東・関西の市場のほか、レストランや食品製造業者でも評価の高い良質の農産物を産出し、乳用牛や肉牛などの育成も盛んな地域である。特に男爵いもは「今金男しゃく」の名で全国ブランド化され、その味と品質は「日本一」との評判のほか、道内での流通が少なく、なかなか入手できないことから「幻のイモ」ともいわれている。

このように農業を基幹産業とする今金町は、高品質な農畜産物の供給基地として発展してきたが、近年は若年層の都市流出や少子高齢化の進展に伴う人口減少に歯止めがかからず、地域経済が衰退している状況にある(平成 27 年 3 月末の人口、5, 613 人)。また、清流日本一の後志利別川をはじめ、豊かな自然資源や高品質な農畜産物など観光資源となり得るものがあるものの、それらを有効な資源として活用しきれておらず、さらに主要幹線から離れているという交通アクセスの不便もあり、観光入込客数も低迷している。

こうした背景にある今金町では、平成 24 年 10 月 5 日に住民、大学などで協働のまちづくりを推進する基盤組織として「今金町人流創生プロジェクト協議会(i プロ)」を設立した。さらに、同年 10 月 16 日には、産業、文化、まちづくり、学術の分野等で協力するために、札幌国際大学と「地域連携事業に関する協定」を締結した。これによって、本学の有するノウハウや研究の蓄積及び関係機関とのネットワークを活かし、観光による地域産業の活性化、交流人口の増加を目指して本学学生と地元住民(今金町人流創生プロジェクト協議会)が協力し、今金町の魅力を探り、その魅力を町外に発信する「地域資源発掘・再発見事業」、や「田舎暮らし体験事業」をはじめ、外国人留学生をモニターとしてインバウンドの可能性について検証する「外国人留学生による今金インバウンドモニターツアー」、冬季の旅行商品開発のための「冬の今金モニターツアー」などのプロジェクトに取り組んできた。

II 研究概要

1. 研究の目的

森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くイギリス発祥の「フットパス」は、近年、日本においてもさまざまな地域で、特徴を活かした魅力的なコースが整備されてきている。現在、北海道には 40 を超える市町村に 200 を超えるコースがあり、各地で「フットパス」に関連したイベントも開催されている。檜山管内においても、せたな町・奥尻町・江差町 3 町では、すでに日本海フットパスとしてマップ整備がなされている。しかし、本学と地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町には、フットパスコースの整備がなされていないことから、今金町をフィールドとして、地域の有する自然環境資源を生かした固有のフットパスモデルコースの設計・検証を行うと共に、地域観光振興におけるフットパスの可能性について今金町と共同で調査研究を行う。

2. 研究組織

本研究は、今金町と札幌国際大学の共同研究であることから、以下の体制で研究を進める。なお、学生については、観光ビジネス学科とスポーツビジネス学科の 3 年生が参画する。

【研究推進組織】 今金町まちづくり推進課、産業振興課、今金町人流創生プロジェクト協議会
札幌国際大学観光ビジネス学科3年生、スポーツビジネス学科3年生
スポーツビジネス学科教授 佐久間章、観光ビジネス学科教授 丹治和典

【調査研究スケジュール】

今金町におけるフットパスモデルコースの設計・検証及び、地域観光振興におけるフットパスの可能性について、以下のスケジュールで調査研究を行った。

- 6月20日(清麗祭) 担当者打合せ 於：札幌国際大学
本研究の年間計画及び第1回フィールドワークの実施計画について
- 7月24日～26日 【現地調査①】第1回フィールドワーク 於：今金町
町並み、自然、景観等を踏査し、コースのポイントとなる候補地点の洗い出し
ポイント地点周辺のトイレ・休憩所等の環境調査、モデルコース案の設計
- 8月27日 担当者打合せ 於：札幌国際大学
第2回フィールドワークの実施計画について
- 9月11日～13日 【現地調査②】第2回フィールドワーク 於：今金町
モデルコース案の再検証・評価、コースのリデザイン、コースサイン・マップ検討
- 10月11日～12日 成果報告会 於：今金町
モデルコースの紹介と本調査研究の成果について報告。
- 12月19日～20日 マップ贈呈式 於：今金町
町長へのマップ贈呈、マップの活用方策についてのワークショップ

Ⅲ フィールドワーク等実施状況

1. 第1回フィールドワーク

- (1)日程 平成27年7月24日(金)～平成27年7月26日(日)
- (2)参加者 学生(男：9名 女：5名 計：14名) 引率教員(2名)

■7月24日(金) FW1日目

*今金町内の「フットパスA」「フットパスB」コース作成のため調査を実施。



■7月25日(土) FW2日目

*今金町神丘地区の「フットパスC」「フットパスD」コース作成のため調査を実施。コースの各所では、農業を営む住民の方と交流する場面も見られた。本日の調査結果について、発表し全体で共有した。また、地域イベント会場において、来場者を対象にフットパスに関するアンケート調査を実施した。雨天の為、来場者が少なかったが、16人から回答を得ることができた。



2. 第2回フィールドワーク(9月11日～13日)

(1) 日程 平成27年9月11日(金)～平成27年9月13日(日)

(2) 参加者 学生(男:6名 女:4名 計:10名) 引率教員(2名)

■9月11日(金) FW 1日目

* 今金町内の新たなポイントやコースの調査を行った。また、商店などにも立ち寄り新たな魅力やポイントの発掘などを行った。



■9月12日(土) FW 2日目

* 神丘地区のコースについて、前日と同様に調査を行った。

グループ毎に本日の調査結果をまとめ、担当コースのMAP作成を行なった。



■9月13日(日) FW 3日目

* 担当コースのMAPを作成し、決定したコースについてグループ毎にプレゼンテーションを行った。



3 成果報告会(10月11日～12日)

(1) 日程 平成27年10月11日(日)～平成27年10月12日(月)

(2) 参加者 学生(男:9名 女:2名 計:11名) 引率教員(2名)

* コース説明及びフットパスコースの体験

これまでの活動をスライドで説明するとともに、完成したマップの概要について町民へのプレゼンテーションを行った。その後、作成したコースを実際に町民と共に体験した。



4. マップ贈呈式・マップ活用方策についてのグループワーク(12月19日)

(1) 日程 平成27年12月19日(土)

(2) 参加者 学生(男:9名 女:2名 計:11名) 引率教員(2名)

今金町役場にて、外崎町長へのコースマップの贈呈と意見交換を行った。

また、フットパスコースの今後の活用方策についてのグループワークを実施した。



IV 成果と課題 ～調査研究を振り返って～

本調査研究では、地域観光振興の視点から今金町をフィールドとして、フットパスコースの設計を行ない、フットパスの可能性について検討を行うため、7月から12月の間に、計4回延10日間にわたり同町においてフィールドワークや調査・検討を行った。本研究を通しての成果と課題を以下に整理する。

1. フットパスプログラムの提供とファンづくり

フットパスを歩く楽しみを見つけた人は、遠くからであろうと、何度でもその地域に足を運ぶようになる。そして、その地域の魅力にひかれ、その地域のファンとなりリピーターとなると言われている。本研究は、コースの設計という初期段階のものであり、コースのファンづくりまでは、手をつけることはできていない。しかし、10月に開催された連携事業「秋のヘルシーウォーキング『今金フットパス』」は、作成したコースの魅力等を学生自らがプレゼンし、参加者と共に実際にコースを体験するプログラムを実施した。従前、この事業は、教育委員会が中心となり健康促進のための社会教育事業として実施していた。しかし今回は、完成したフットパスコースの紹介を兼ねて教育委員会だけではなく町保健福祉課、町まちづくり推進課、総合型地域スポーツクラブいまかねが共催し、さらには今金町人流創生プロジェクト協議会、札幌国際大学、すっきりサークル、食育サポーターが協力に名を連ねて実施した。とかく縦割りと揶揄される行政組織にあって、ネットワーク型行政を具現化する形で試行された本事業には、これまでの単一主体では情報を届けることのできない人にまで各組織が有する広報手段等を駆使することによって届けることができた。参加

者の中には、八雲町をはじめとする近隣町村からの参加も多くあり、今後の来訪者増によるファンづくりや交流人口拡大への可能性を感じるものであった。

本調査研究に参画した学生の多くは、今金町の所在地さえも知らない状況であった。しかし、訪問を重ねるにつれて今金の魅力を各自の視点で発見し、自らの言葉で説明できるようになってきた。訪問後のレポートは、すべての学生が、今金の魅力について触れており、何よりも学生が一番の今金ファンになった。これも7月から12月の間に、計4回延10日間にわたり同町において活動を行ったことが、少なからず影響している。このように、ファン獲得のためには、来町機会を増やすことが必要であり、そして今金町には確実にファンを獲得するだけのポテンシャルがある。近年の健康に対するニーズの高まりを背景に、フットパスプログラムは、多くの参加者を集約する可能性を期待できる。こうした事業が定期開催されることによって、来町機会の拡大に繋がり、さらには今金のファンづくりにも繋がることが期待できる。

2. まちづくり推進のプラットフォーム形成

フットパスコースの作成に中心的な役割を担ってきたのは、本学学生と今金町人流創生プロジェクトのメンバーである。しかし、その他にも町職員、商工会関係者、まちづくりグループ、住民等の多様な関係者のサポートを受けてコース設計を行ってきた。こうしたサポートなしには、コース設計も思うように為し得なかった。しかし、一方では、本調査研究を通して、サポートにあたった町内の多様な組織・団体・個人の間の連携も少なからず進んだ。このことは、本調査研究がフットパスコースづくりというひとつの課題を解決するために、町内外の多様な組織・団体・個人を結びつけたことになる。本学との共同プロジェクトによりフットパスコースの設計という課題解決の取組は、町内の多様な組織を繋ぎ、新たなネットワークの形成に一定の効果があったと考える。フットパスのコースづくりは、共に地域の魅力を探求する活動であるとともに、相互の連携構築・促進の効果も期待できるものである。そして、形成されたネットワークは、コース作成を為し得た今後においても、これからのまちづくりのプラットフォームとなり得ることが期待できる。

3. 今後の課題 ～「我町のフットパス」を目指して～

1年間の調査研究活動を経て今金町に、フットパスのコースを作成することができた。しかし、これで終わりではなく、まさにここからがフットパスによる地域観光振興のスタートと言える。コース情報を効果的に提供するマップの作成や、コース内に必要なサインを整備したり、さらには広くコースを周知・活用してもらうためのフットパスウォーク等のイベントの開催も必要となる。また、フットパスコースを定期的に点検し、コース上に不具合があれば補修する維持管理の体制も求められる。このためには、今金町におけるフットパス活動を所管する組織を明確にする必要がある。日本国内のフットパス先進地の多くは、活動を支える組織体制を持っている。北海道黒松内町は「黒松内町フットパスボランティア」、東京都町田市は「NPO法人みどりのゆび」、熊本県美里町は「美里フットパス協会」などがその例である。それぞれの推進組織の体制は異なっているが、いずれもフットパス普及のため様々な活動を行っている¹。このように今金町においても、所管組織を明確にすることが今後の大きな課題と言える。しかし、フットパスに関わるすべての業務を一組織に委ねるのであれば負担も大きく、継続的な活動を維持することは至難となるに違いない。そこで、コースサインの制作やイベントの企画・運営、コースを案内するガイドボランティアの養成など、より多くの町民がフットパスに関わりフットパスを育てていくことが必要である。そして、その過程こそが、町民がコースへの愛着を深め、フットパスのファンとなり、地域観光振興のツールとしての「我町のフットパス」が定着するのではないかと思う。

また、推進組織の体制のみならず町民のおもてなし体制を整えることも重要である。とりわけ、今金町のコースは、農地や商業地を中心にレイアウトされている。四季で異なる田畑の景観や特産品やスイーツなどを味わうことのできる店は、コースを歩く人にとって大きな魅力である。しかし、

さらにコースの価値を高めるためには、町民のおもてなしが必要である。畑の景観を楽しみながら歩く人に、農作業の傍ら挨拶などの声かけをする。商店街を訪れる人には、商品のネーミングや由来・原材料の特徴など、付帯情報を積極的に提供する。このように、フットパスで来町する方々とのコミュニケーションが、「我町のフットパス」に大きな付加価値となるはずである。「今金町の魅力は、景観はもとより、人の温かさ」という多くの学生の感想がそれを裏付けている。

おわりに

本調査研究は、学部・学科を超え観光学部観光ビジネス学科とスポーツ人間学部スポーツビジネス学科の3年生による共同プロジェクトとして実施した。観光とスポーツをビジネスという共通の視点で捉えると「フットパス」は、まさに恰好の課題であった。それぞれの専門領域の学びを踏まえ、異なる学科の学生がフィールドワークや協議を通して与えられた課題の解決にむけての取組は、学生にとってコミュニケーションスキルや複眼思考のトレーニング機会としても貴重であった。さらに、今金町人流創生プロジェクトメンバーが加わることにより、世代を超えたメンバーとの協議など、学内では用意することのできない環境の中で、学生の学びを展開できたことも大きな成果の一つである。

フットパスの推進は、地域活性化や地域観光振興の視点から注目されている。しかし、単にコースを設置さえすれば、来訪者増による交流人口が拡大し、地域観光振興に繋がると言うものではない。神谷²は、フットパスに内在するまちづくりの力について5つの要素を挙げている。第1の要素は、まちづくり資源の発見。第2の要素は、ファンづくり。第3の要素は、共同体の再生。第4の要素は、プラットフォームの形成。そして、第5の要素は経済効果である。しかし、これらの要素は、コースの設置によってすべてのまちづくりの力を享受できるものではない。コースの設置から活用までの過程において多くの町民が関与し、試行錯誤し、育てていくことが「まちづくり」の原動力になるということではないだろうか。今金町のフットパスは、コースを作成したに過ぎず、歩き始めたばかりである。如何に育てていくか、今後も注視していきたい。

【注】1 「2013年度 地域課題研究」 北九州市立大学都市政策研究所 2014年3月
地方都市におけるフットパス導入による地域活性化の検討と課題
内田晃（北九州市立大学）pp. 39-58

2 神谷由紀子編著 「フットパスによるまちづくり～地域の小径を楽しみながら歩く～」
（株）水曜社 2014年5月